

山王遺跡6

－山王遺跡群第7次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1187集

2013

福岡市教育委員会

S A N N O U

山王遺跡6

－山王遺跡群第7次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1187集



遺跡番号 HEM-7
調査番号 1118

2 0 1 3

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では国内外の交流が盛んであったと考えられている弥生時代終末から古墳時代初頭の集落跡や中世の館跡の可能性がある漆の跡が発見されました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者、事業者の方々をはじめ多くの関係者のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成 24 年度に事務所・倉庫建設に伴い、福岡市博多区山王二丁目 29 番で実施した山王遺跡第 7 次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧のほか藤野雅基が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は平川敬治、荒牧、淨書は樋口久美子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は土器、石器、鉄器等に分けて通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として竪穴住居跡を SC、土壙を SK、溝を SD、柱穴を SP、性格不明のものを SX とした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には『大宰府条坊跡 X V』太宰府市の文化財 第 49 集 2000 太宰府市教育委員会、山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性〔10〕九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第 71 集 1997 の編年・分類を用いた。

遺跡名	山王遺跡	調査次数	11 次	調査略号	HEM-7
調査番号	1118	分布地図図幅名	東光寺 (37)	遺跡登録番号	2379
開発面積	710m ²	調査面積	320m ²	事前審査番号	23-2-81
調査期間	20110728 ~ 20111019	調査地	福岡市博多区山王二丁目 29 番		

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	1
1.	地形	1
2.	既往の調査から	2
3.	史料から	2
III	調査の記録	3
1.	基本層序	3
2.	溝 (SD)	3
SD01		3
SD02		6
SD09		7
SD32、SD33		7
3.	竪穴住居跡 (SC)	9
SC06		9
SC11		10
SC27		13
SC34		14
SC206		16
SC205		18
SC214 (213)		19
SC208、209		22
その他の住居跡出土遺物		22
4.	土壤 (SK)	22
SK239		22
5.	井戸 (SE)	24
SE18		24
SE19		27
SE28		29
SE31		29
SE35		29
SE117		29

SE128	33
6. 柱穴出土土器	34
7. その他の遺構出土遺物	34
IV おわりに	35

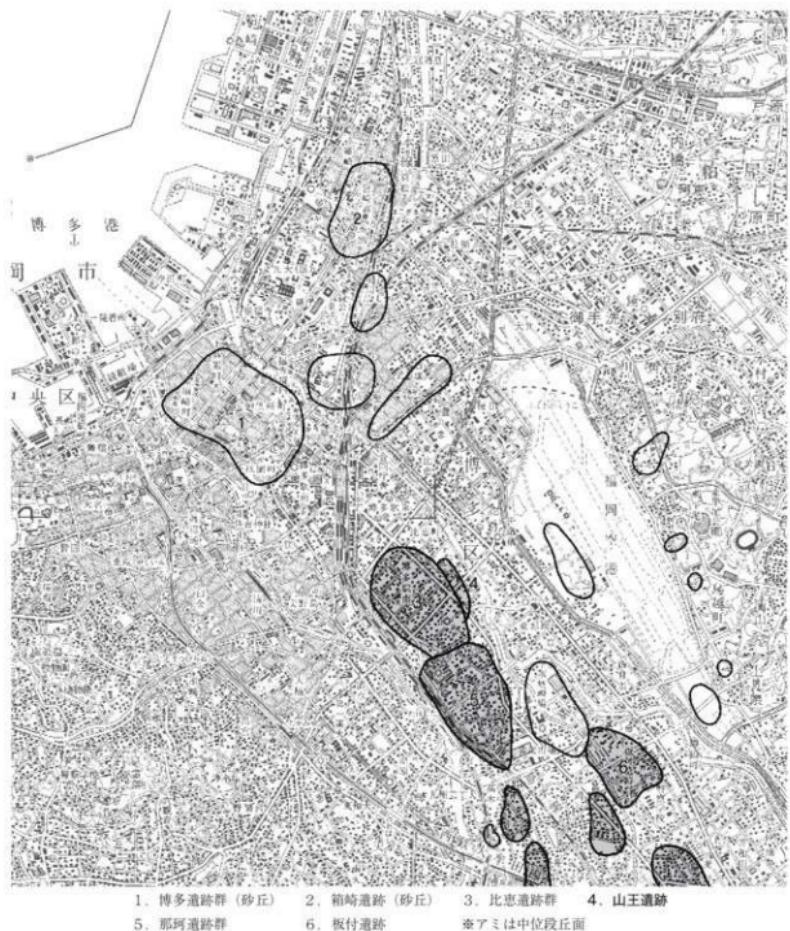


Fig.1 遺跡分布図 (1/50,000)

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市博多区山王二丁目29番における事務所、倉庫建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成23年4月28日付で受理した（事前審査番号23-2-81）。これを受け文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である山王遺跡に含まれ、試掘調査によって現地表面下30～100cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関する申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから駐車場を除く事務所・倉庫部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成23年7月20日付で事業者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。統いてこの契約に従い発掘調査を同年7月28日から10月19日まで実施し、翌平成24年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

以下の組織体制で調査・整理を行った。

【調査主体】福岡市教育委員会

【調査総括】文化財部埋蔵文化財第2課（現・埋蔵文化財調査課）課長 田中壽夫（23年度）
宮井善朗（24年度）同課調査第1係長 米倉秀紀（23年度）常松幹雄（24年度）

【庶務】埋蔵文化財第1課（現・埋蔵文化財審査課）管理係長 和田安之（管理係
井上幸江（23年度）川村啓子（24年度）

【事前審査】埋蔵文化財第1課（現・埋蔵文化財審査課）事前審査係長 宮井善朗（23年度）
加藤良彦（24年度）同課事前審査係主任文化財主事 加藤良彦（23年度）佐藤一郎（24年度）同課事前審査係文化財主事 木下博文（23年度）森本幹彦（24年度）

【調査担当】埋蔵文化財第2課（現・埋蔵文化財審査課）主任文化財主事 荒牧宏行

【発掘作業員】坪山恵子 野口リウ子 小島君子 西尚文 許斐拓生 林春治郎 工藤幸男
河崎征治 花田昌代 坂口壽美子 中野容子 保坂由美子 小出義之 玉川美月（奈良大学）末廣いづみ（九州大学）

なお、文化財部は組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

II 位置と環境

(1)地形

山王遺跡は福岡平野の北端に位置した中位段丘面に立地する。西側の同じく中位段丘面に占めた比恵・那珂遺跡群とは旧河道の谷を隔てて対峙する。（「山王遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集 2006 P-2～5）

山王遺跡の北端は丘陵となり日吉神社が祀られている。Fig.2やFig.60で示すようにその丘陵の形状は前方後円墳に近似し、注目される。（「山王遺跡1」前掲P-2）現在、山王公園となって

いるが第2次調査では比恵遺跡群と山王遺跡との間の谷部を検出した。

(2)既往の調査から

本調査の主な遺構の時期である弥生時代と中世について概略を記す。弥生時代前期では北側の6次調査で木棺墓や壺棺墓が検出されている。また、中期になるとこの北側の6次調査地点から既往の調査地点のなかで最も南側の5次調査地点までは全面的に集落が展開している。弥生終末から古墳初頭の時期では6次、4次、7次（本調査）の北側で集中的に掘立柱建物や竪穴住居跡が検出されるようになる。

中世では6次調査の土壙墓SK08、陸橋のみられる溝のように11世紀後半以降13世紀前半位までの屋敷地が展開し、12世紀代には既往の調査地点のほぼ全面に広く遺物や遺構がみられるようになる。14世紀では3次調査で溝が検出されたのみで、集落が移転し集村化が進みはじめたことが考えられる。

その後の資料は無いが、明治34年の地形図では山王遺跡一帯に集落はみられず、近世には耕地化したことが考えられる。

(3)史料から

『角川 日本地名大辞典』によれば「山王」の地名は昭和27年以降で「比恵」や「那珂町東光寺」の一部で、戦国期以降にみられ天文六年（1537）に菖崎宮領で屋敷があつたことが記されている。天文十五年（1546）の史料から北野天満宮領が存在し大内氏の半済の対象地であったという。その後、大友氏家臣の領地化が進んだ。



Fig.2 調査地点位置図 (1/6,000)
破線は旧比恵甕棺遺跡 ドットは甕棺検出地点



Fig.3 調査地点位置図 (1/2,000)

III 調査の記録

調査の概要

検出された主な遺構は近世以降の水路2条、中世の溝（濠）2条、弥生終末から、古墳初頭にかけての堅穴住居跡9軒以上、弥生前期の土壙1基、中世の井戸1基、弥生終末～古墳初頭の井戸6基である。北側4次調査で検出された遺構の延長がみられる。

(1) 基本層序

Fig.4に示した南東部の土層から基本層序を記す。調査区全面に敷かれた層厚約7cmのクラッシャーの下に3層に分層できる水田耕作土が堆積する。さらに下層に均質な土器細片を若干含む程度の明褐色土が層厚約40cmで堆積していた。近世以降のSD33はこの包含層を掘り込んでいる。本調査の遺構面は包含層下の標高約6.0mで堆積する鳥栖ローム面である。

(2) 溝 (SD)

中世後半期の溝SD01、SD02と近世以降とみられるSD32、33の4条の溝が検出された。近似した方向に掘削されているが、SD01、02が2段掘りで粘質土の堆積であるのに対し、SD32、33は灰色の砂質土の堆積で明らかに水路としての利用が考えられる。

SD01

調査区中央部を東西方向に走行する。西側の延長は第4次調査のSD01に続き、南側に直に折れる。幅3.2～4.1mを測り、検出面から中央の2段掘り状となった最深部までの深さは95cmを測る。最深部の深さは調査区内の延長約18mの東西両端ではほとんど変わらない。この2段掘りに沿って北側に分岐した平坦な底面が検出された。以下の土層観察からこれは中央部の埋没後に掘り直された溝(SD119)と考えられる。この溝は上面幅3.1m、下面幅1.2m、検出面からの深さは45cmを測る。分岐した付近の落ち際には幅20cm、深さ3～10cmの底面が水流に洗われた為と思われる凸凹が著しい溝状の凹みが検出された。

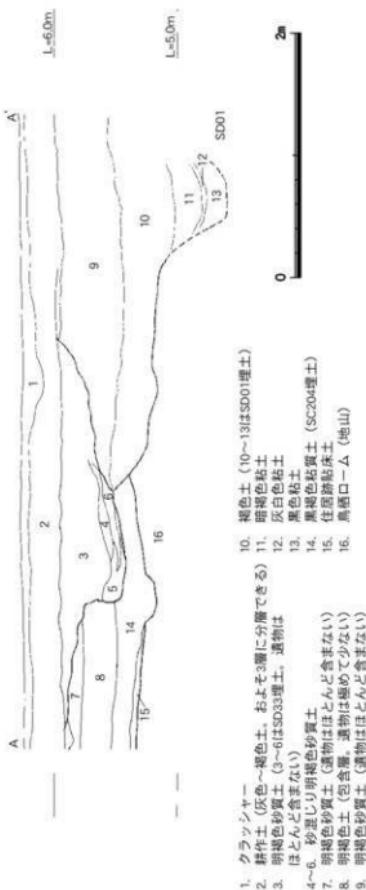


Fig.4 調査区東壁土層及びSD01・SD33土層(1/40)



Ph.1 全景（南東部除く 南から）



Ph.2 中央部遺構（南から）

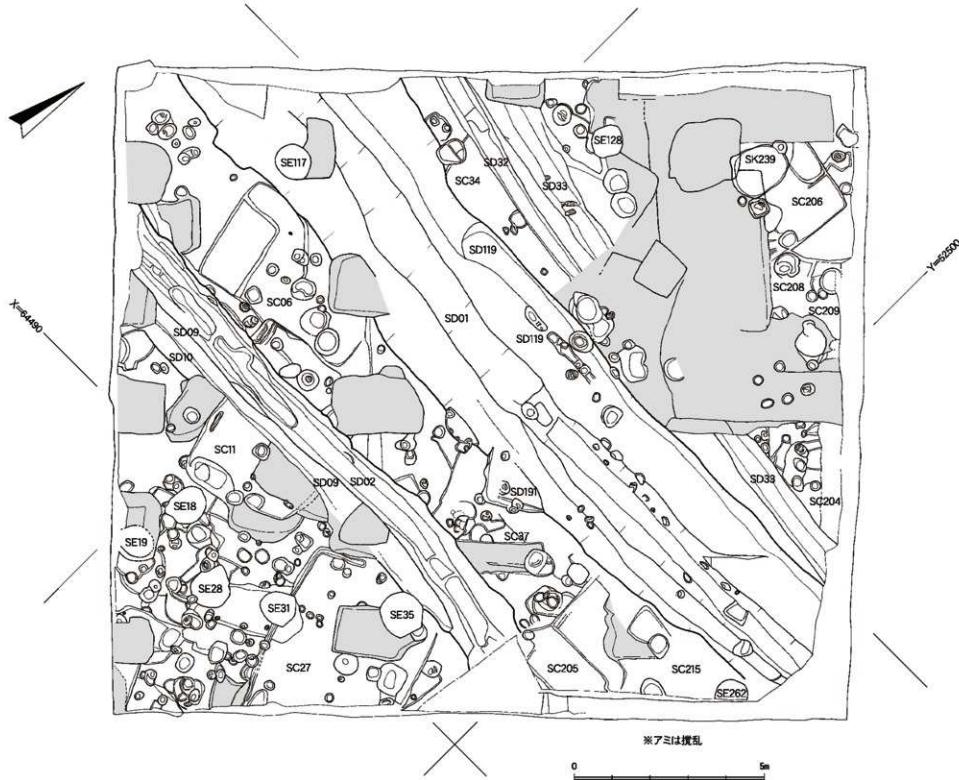


Fig.5 遺構配置図 (1/100)

埋土の堆積状況は3段階に大別できる。まず、2段掘りとなった最深部が赤色ローム混じりの黒色粘土を主体とした土が南側から流入して埋没している。次にその上層に同じく南側から赤色ロームや暗色の粘質土が堆積している。最後に北側のテラス状になつた平坦な底面の溝（SD119）が掘り直され埋没している。従つて、南側に土壌が築かれていたと考えられる。

出土遺物

1は瓦器椀で白色を呈す。2は小形の青磁椀である。遺存する外底から高台はすべて露胎である。内底部にはオリーブ色の釉が施されている。3は搅乱から出土した朝

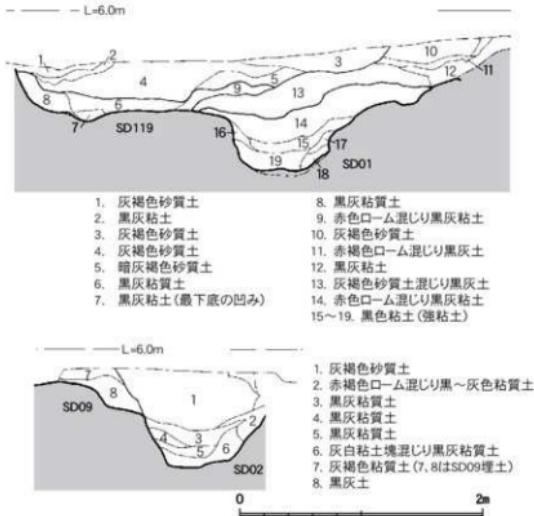


Fig.6 SD01, 02 土層断面図 (1/40)



Ph.3 SD01 土層 (西から)



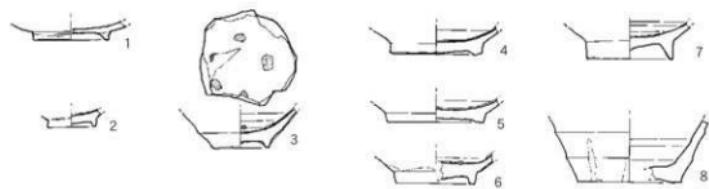
Ph.4 SD02 土層 (東から)



Ph.5 SD33 土層 (西から)



Ph.6 SD32, 33 検出 (東から)



(1~10はSD01出土)



(11~17はSD02出土)

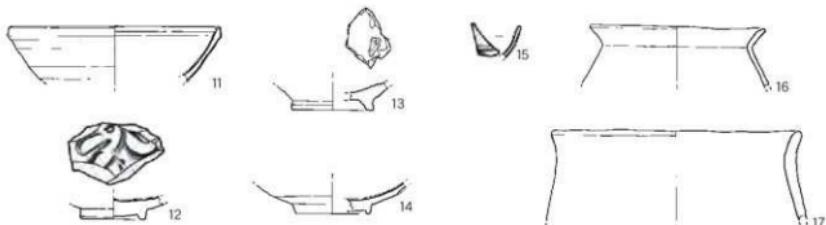


Fig.7 SD01, 02 出土土器実測図 (1/4)

鮮灰青陶器もしくは唐津焼である。外面の高台疊付以外は淡黄白色に発色した釉が施され、外底と高台内底部の釉にピンホールが多くみられる。疊付と内底の5箇所に砂の目跡がみられる。外面体部と底部の境は緩やかな稜を有し、高台へ湾曲しながら移行する。内底部には螺旋状にヨコナデの稜線がみられる。4,5は白磁碗である。遺存する外面はすべて露胎である。6の白磁碗は皿類の内面の釉を環状に掻き取ったものである。外面は高台から露胎となる。7も白磁碗皿類で内面の釉を環状に掻き取り、遺存する外面は露胎である。釉は薄く淡黄褐色に発色している。8は陶器壺である。遺存する内面は露胎で、外面は底部が露胎である。他は施釉されている。釉は緑灰色を呈す。9は攪乱から出土の素焼きの陶器である。外面に6角形と円文を組み合わせたスタンプが施されている。10の瓦は凸面に縄目タタキ、凹面に布目が残る。鉄器2は形状不明。3は釘もしくは、鉄錐の茎であろう。4は楔か。

SD02

SD01に平行して略東西方方向に走行している。幅2.0m、断面形が2段掘り状となり、検出面から最深部までの深さは約1.0mである。調査区内の延長14mでの下底の比高差はほとんどみられない。下底の幅は約50cmで深さ5cm前後の浅い凸凹がみられる。

南側にSD09の下底がテラス状となり、土層観察からSD09を掘り直して、SD02が築かれていることがわかる。SD02の下底から約40cmまでは粘質土が自然に堆積した状況がみられるが、その上層は均質な褐色土の单層で埋没している。

出土遺物

11は小さな玉縁の白磁碗である。やや青みを帯びた灰色を呈す。12は龍泉窯系青磁碗で見込みに草花文を片彫りする。外面の高台置付から内側は露胎である。13は青磁碗である。見込みに粘土の目跡が残る。高台置付の軸を削り取った以外は施釉されている。軸は緑灰色を呈す。14は白磁碗である。小さな置付が突出している。外底部は露胎である。わずかに緑色を帯びた灰色を呈す。15は染付である。16、17は混入した古墳時代前期の土師器甕である。

SD09

SD02に掘り直される以前の溝である。SD02に平行した南側のテラス部分として残る。底面までの深さは35cmを測り、下層に黒色土が堆積するため、SD02の堆積土との層界は明瞭である。なお、調査区西壁付近でSD09の南側の一部に別の溝の可能性がある掘り込みが認められSD10としたが、擾乱や削平のため延長を検出することはできなかった。鉄器1の形状は不明。

出土遺物

18は白磁碗である。19は土師器碗である。胎土は緻密で黄褐色を呈し硬質な焼成である。外面底部下半に指押さえの痕がみられる。20は玉縁の白磁碗である。

SD32、SD33

調査区北側を略東西方向に走行し北側にわずかに湾曲する。西側の延長は第4次調査のSD02に統合、合体しているので、SD32、33は掘り直しによるものと考えられる。埋土は他の遺構と明らかに異なる灰色砂質土が堆積し流水を示す。東側でSD32がSD33から分岐しているものとみられるが擾乱によって分岐点は不明である。

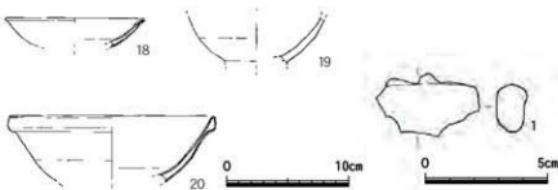


Fig.8 SD09出土土器実測図 (1/4)

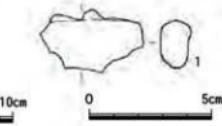


Fig.9 SD09出土鉄器実測図(1/2)

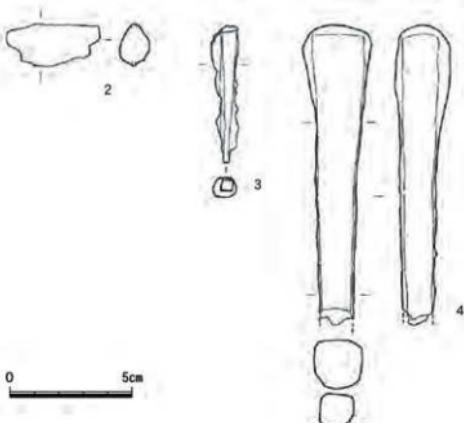


Fig.10 SD01出土鉄器実測図(1/2)

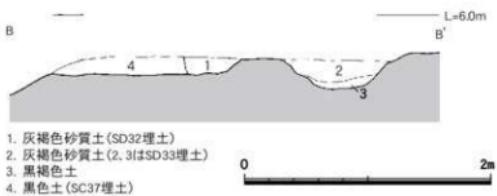


Fig.11 SD32, 33 土層断面 (1/40)



Fig.12 SD33 出土土器実測図 (1/4)

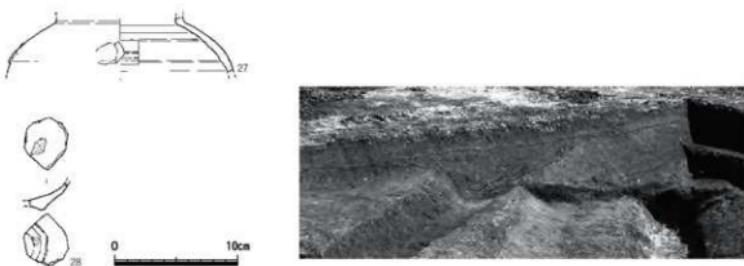


Fig.13 SD32 出土土器実測図 (1/4)

Ph.7 SD33, SD01 土層 (西から)

SD32 の幅 45cm、深さは 15cm、SD33 は幅 80cm ~ 120cm を測り北端で広がる。深さは 25cm 程度である。調査区内の東西では下底のレベルの比高差はみられない。

出土遺物

21 ~ 23 は SD33 出土遺物である。21, 22 は染付である。23 は陶器楕である。釉は外側は淡緑灰色、文様と内面は濃緑灰色を呈し、体部下半は露胎である。24 は青磁楕である。釉はオリーブ色を呈し、外側体部下半は露胎である。25 は七輪底である。26 は接釉陶器壺である。遺存する部分の内外面は施釉されている。同一個体とみられる胴部破片の外面には斜格子のタキが施されている。

27, 28 は SD32 出土遺物である。27 は白磁耳壺である。28 は唐津焼か。緑青色の釉色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。見込みと高台疊付に砂の目跡が残る。

(3) 壺穴住居跡 (SC)

弥生後期から古墳初頭までの壺穴住居跡 9 軒以上が検出された。

SC06

調査区の中央部で検出された。北辺を SD01 に、南辺を SD11 に切られている。東西主軸長 4.76m、南北 3.0m の長方形プランを呈す。壁高 15cm 程度が遺存する。西辺に南北 2.2m × 東西 1.1m、高さ約 10cm のベッド状遺構が設けられている。中央に径 60cm、深さ 20cm のピットが検出されたが、炉跡の焼土は検出されなかった。主柱穴は P1、P2 と考えられる。南辺に貼床土の落ち込みがみられ、床面からの深さ約 50cm の SP159 が検出された。南東隅に SX16 (深さ 64cm)、SX17 (深さ 50cm) が検出され、それぞれに器台 (33)、小窓 (32) の大きな破片が出土した。

出土遺物

29 は丹塗の壺口縁である。30 はくの字に屈曲した壺口縁、31 は中期の壺口

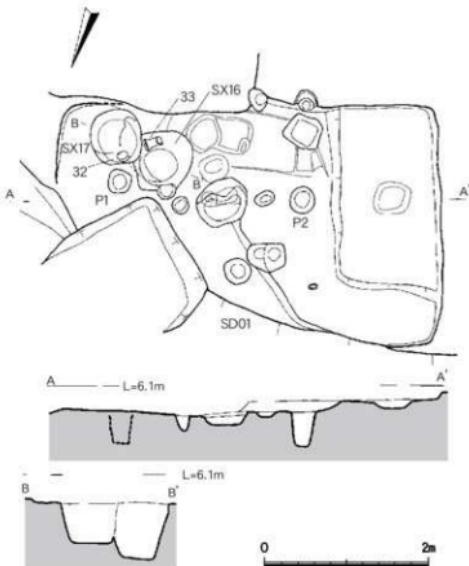
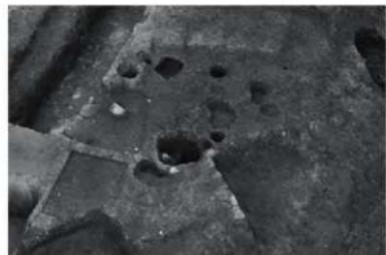


Fig.14 SC06 実測図 (1/60)



Ph.8 SC06 完掘 (東から)



Ph.9 SC06 内 32, 33 出土状況

縁である。32 は SX17 から出土した小形窓である。径 4.5cm の平坦な小さな底部が成形されている。調整は外面は不明であるが、内面の頭部以下には丁寧なナデが施されている。33 は SX16 から出土した器台である。外面体部には粗いハケメを残し、内面の脚部鉢付近には成形時に用いた板木口の圧痕が残る。34 は土製の投弾である。

出土遺物の下限の時期は弥生終末と考えられる。

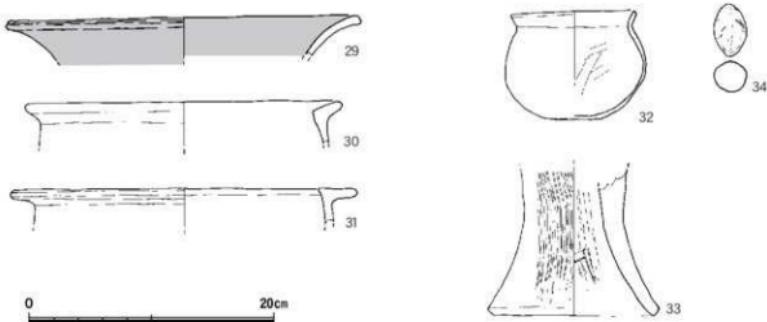


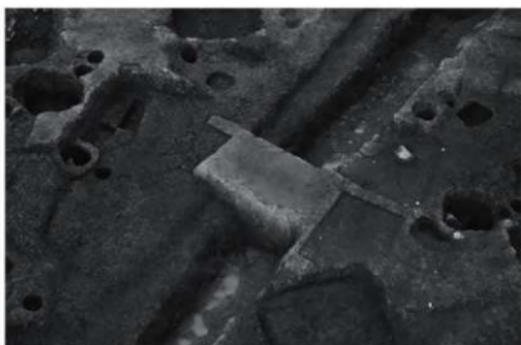
Fig.15 SC06 出土遺物実測図 (1/4)

SC11

調査区の中央南寄りで検出された。中央を SD02 に切られ、北辺は SC06 を切っている。南北長 4.7m、東西長 3.0 ~ 3.3m を測り、SC06 とほぼ同規模であるが長軸方向が直交する。西辺に断続して幅 16 ~ 20cm の壁溝が検出された。北東部に焼土が検出されたが中央には位置しない。主柱穴は P1、P2 の可能性がある。南西隅に壁に沿って長軸長 140cm、短軸長 70cm の土壙 SX47 が検出された。深さ 15 ~ 20cm を測り、上層に黒色土、下層に明褐色ロームを主とした堆積がみられた。

出土遺物

35 の小形の鉢は外面体部に斜行、口縁部にヨコ方向のハケメを施す。内面ナデ調整である。36 の複合口縁壺は外表面の器面が剥落し調整は不明。胎土に



Ph.10 SC11 完掘(東から)



Ph.11 SX47 土層(北から)

1mm 大の砂粒を多く含む。37 の複合口縁壺の内外面の器面も剥落し調整不明。胎土に径 2mm の大きめの砂粒まで多く含む。38 は壺頭部の刻みを施した突帯である。40 の壺は外面ナデ調整、内面体部に粗いハケメを残す。41 の壺は外面口縁部から頭部にかけてヨコナデを施し、以下の体部には細かいハケメを残す。内面体部はナデ調整。胎土は砂粒が少なく緻密である。42 は混入した中期の壺底部、43 は前期の壺頭部である。頭部に断面三角形の突帯を有し、体部に貝殻列点文を施す。S1 は石剣もしくは石鎌の未製品か。両側縁に剥離痕がみられる。石材

は風化し不明確であるが堆積岩である。S2 は砂岩製の砥石である。火熱を受け赤変している。出土遺物の下限は弥生後期後半から終末と考えられる。

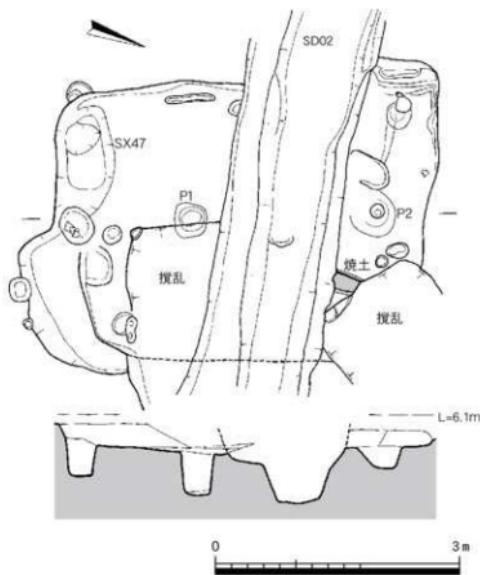


Fig.16 SC11 実測図 (1/60)

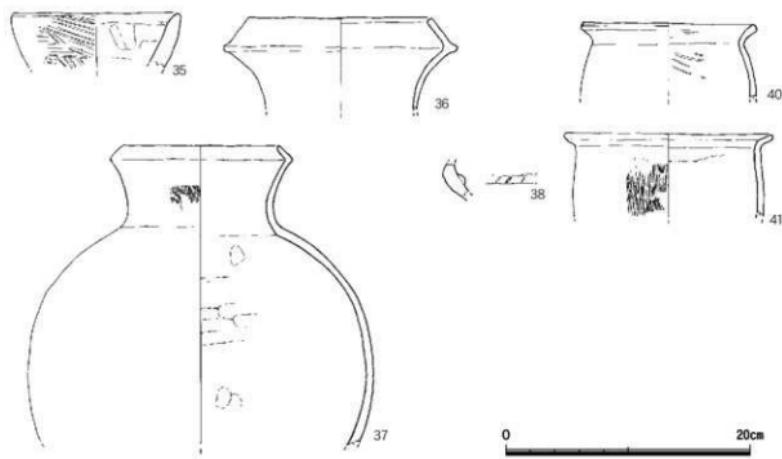


Fig.17 SC11 出土土器実測図 (1/4)

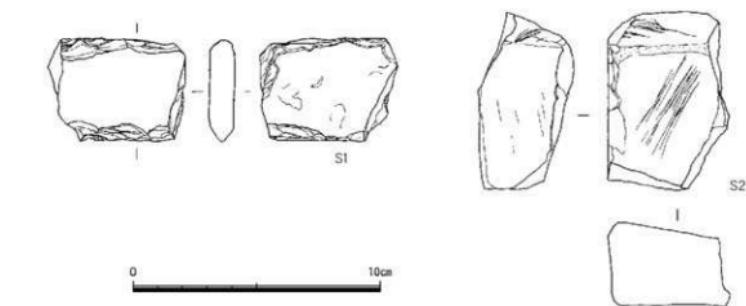


Fig.18 SC11 出土石器実測図 (1/2)

SC27

調査区南壁際で検出された。南辺が調査区外のため規模が不明であるが、東西の短辺長が4.0m、南北の長辺長が4.75m以上を測る。中央炉は深さ13cm、鉢状に凹んだP1の可能性があるが、焼土、炭等は検出されなかった。近くに床面から3cm程度浮いて甕片P1が出土した。主柱穴は中軸線上のP2、3、4と考えられ、西辺に沿った、P4、5、6もこれら主軸線上の柱穴に対応する可能性がある。南辺の中央に長軸長130cm、短軸長70cm程度、深さ13cmの貼床土の落ち込みが検出された。用途は不明である。

出土遺物

44は赤色顔料が塗布された壺で、口縁に穿孔がみられる。45の壺頭部の内面にヨコ方向のハケメが施されている。46の器台の外面にはナデによって不明瞭となった細かいハケメが残る。47の外面にわずかに赤色顔料が残る。口縁端部には刻みを施し、体部にM字状の突帯を貼り付ける。48の甕体部の内外面の器面は剥落し、不明瞭であるが粗いハケメが残る。S3は扁平片刃石斧である。折損部が摩耗し丸くなっている。頁岩製か。S4は石弾か。石材は安山岩に近い。

出土遺物中には弥生中期の

土器が多いが45や46の時期は弥生後期後半以降まで下ると考えられる。

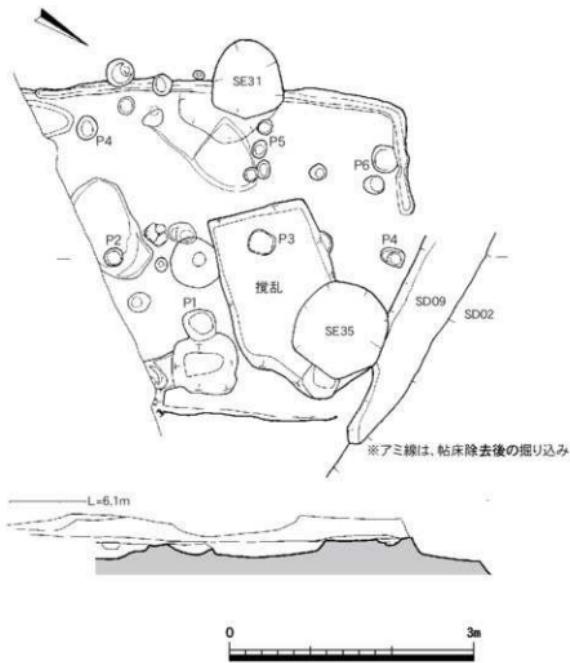


Fig.19 SC27 実測図 (1/60)



Ph.12 SC27 実掘 (東から)

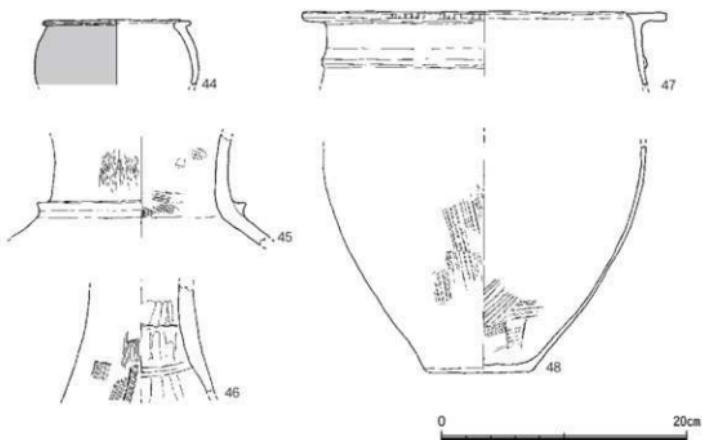


Fig.20 SC27 出土土器実測図(1/4)

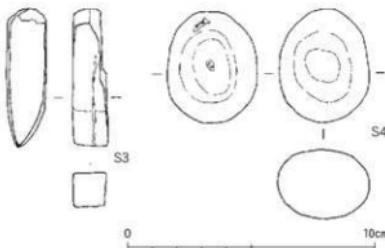


Fig.21 SC27 出土石器実測図(1/2)

SC34

調査区北壁際で検出された。SD01、32、33 や攢乱に切られ、規模や形状が不明瞭であるが、北辺と西辺の一部から SC06 と同方向に配置され、中央炉とみられる SP01 の位置から東西に長い長方形プランを呈していたと考えられる。壁高は 18cm 程度で、西側の床面が 7cm ほど高く、プランは検出できなかったが、SC06 同様に西側に貼り付けのベッド状遺構が付設されていた可能性がある。

炉跡の SP01 は径 70cm、深さ 15cm の浅皿状の断面形を呈す。埋土は炭と焼土が混じりあった単層からなり、周辺にも分布していた。主柱穴の配置は不明であるが、竪穴内の P2 と P3 の 2 箇所で深さ 45cm 程度の柱穴が検出された。

出土遺物

49 の口縁部は湾曲し、調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整とみられる。50 は弥生中期の甕口縁部である。51 の底部はわずかに丸みがある。S5 は 4 面研ぎ込まれ湾曲している。鉄器 5 は留金具状で鉢のような形状がある。出土遺物の下限は弥生後期後半以降と思われる。

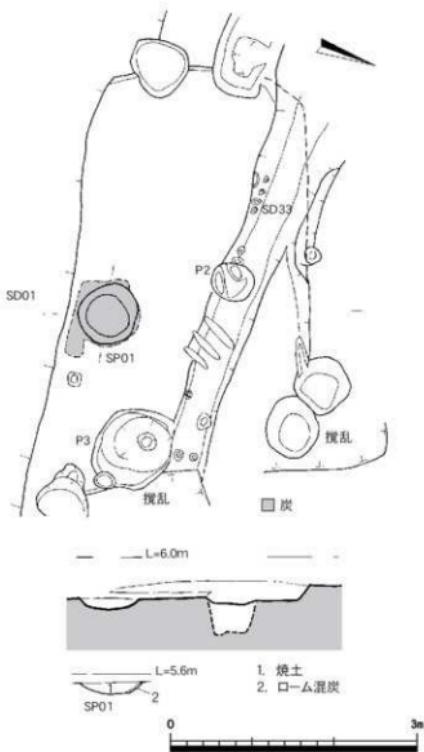


Fig.22 SC34 実測図 (1/60)

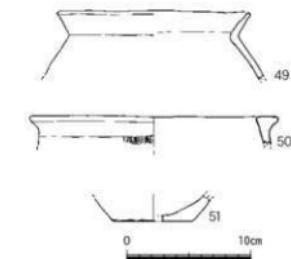


Fig.23 SC34 出土土器実測図 (1/4)



Fig.24 SC34 出土石器実測図 (1/2)

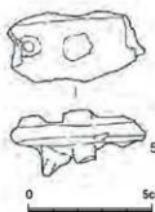


Fig.25 SC34 出土鉄器実測図 (1/2)



Ph.13 SC34 完掘 (東から)



Ph.14 SP01 土層

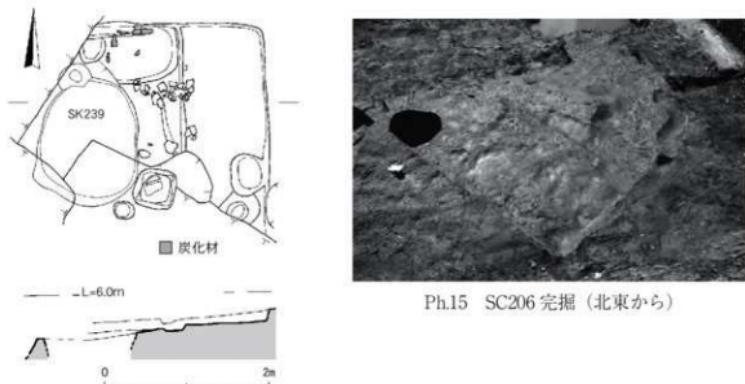


Fig.26 SC206 実測図(1/60)

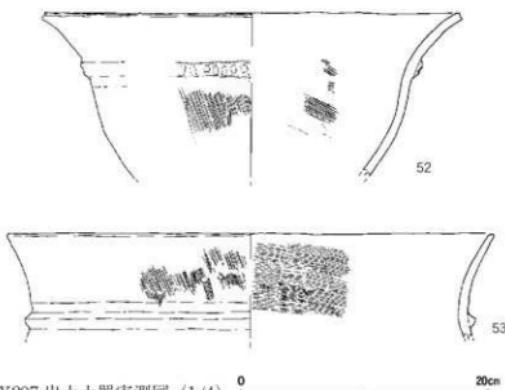


Fig.27 SX207 出土土器実測図 (1/4) 0 20cm

SC206

調査区の北東際で検出された。攪乱のため規模は不明であるが、検出された1箇所のコーナーから方形プランを呈すと考えられる。西側の床面下にはSX239が掘り込まれていた為に床面が落ち込み床面上の出土遺物や炭混じりの埋土も下降したレベルで検出された。北辺に沿って幅70cmに及ぶ方形の落ち込みが検出され、壁際から炭化材が出土した。

出土遺物

52、53はSX239の上部から出土し、上述の通り床面のレベルが大きく異なることからSX207出土として区別したが、SC206出土遺物としてあつかうことができる。52は湾曲した頭部に断面台形の刻みを有した突帯が貼り付けられている。刻みは突帯の頂部に小さな植物などの繊維状の工具で列点状に押さえつけながらヨコ方向に移動している。53は頭部に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁部には外面にタテハケ、内面にヨコ方向のハケメがナデ消されずに部分的に残る。54は台付鉢である。

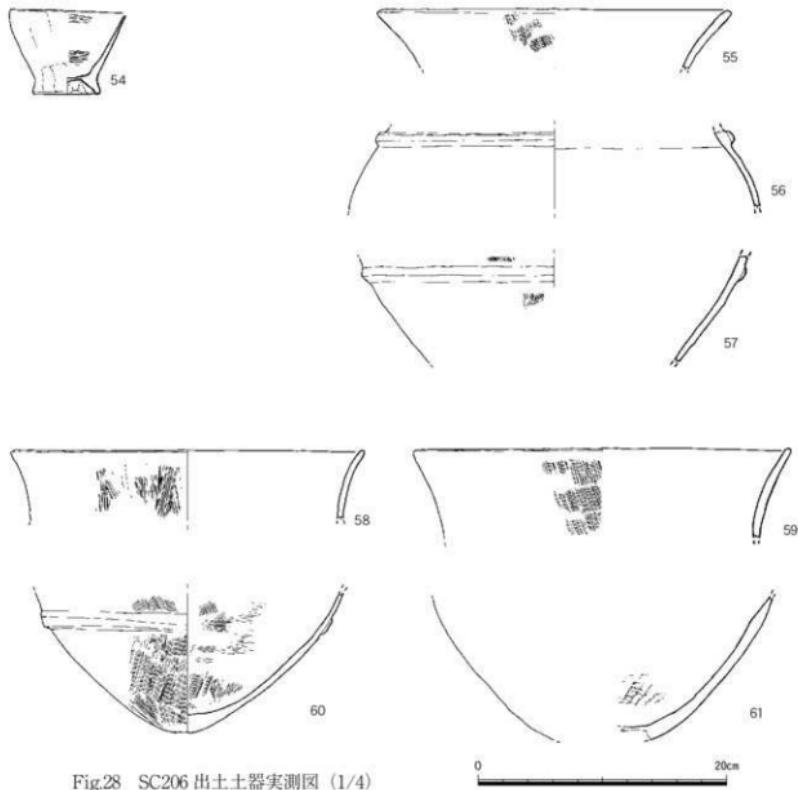


Fig.28 SC206 出土土器実測図 (1/4)

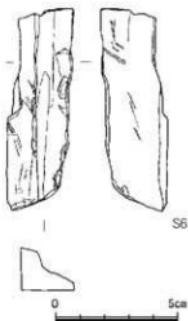


Fig.29 SC206 出土石器実測図 (1/2)

台部は指揮さえによって成形され、直である。底部は薄く丸く突出する。55は直口の甕口縁部である。外面に細かいハケメがわずかに残る。54の頭部には断面方形の突帯を貼り付けている。57は体部下位に断面三角形の突帯を有す。

58～61は西側の床面が下がった範囲から出土したが、同一住居跡出土として見なして良いと考えられる。58の口縁部は外反し、外面にナデ消されなかった粗いハケメがわずかに残る。59も58と同様の器形で、外面には細かいハケメが残る。60は体部下位に断面台形の突帯を貼り付ける。内外面ナデ調整が施されているが、細かいハケメがわずかに残る。61も尖底で貼り付けて器厚になつた部分が剥落している。S6は断面U字状の溝に研ぎ込まれた面と裏面が砥面で他は破損している。材質は硬質砂岩か。

出土遺物の時期は弥生終末から古墳初頭と考えられる。

SC205

調査区南壁際で検出された。南辺に沿って幅1.2mの範囲の床面が5cm高く、ベッド状の貼付がみられる。規模や主柱穴は不明である。

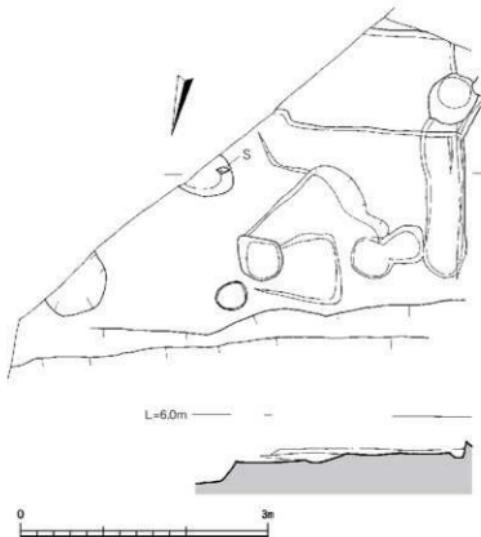


Fig.30 SC205 実測図 (1/60)



Fig.31 SC205 出土土器実測図 (1/4)



Ph.16 SC205 完掘 (南西から)



Ph.17 SC214 完掘（東から）



Ph.18 SC214 遺物出土状況

出土遺物

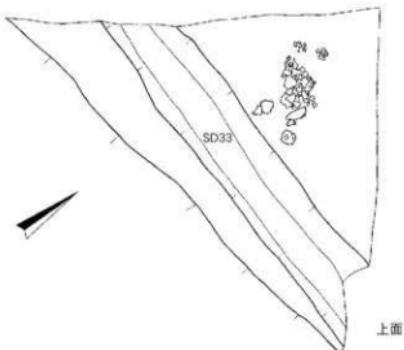
62 は貼床土中から出土した。湾曲した頭部下に2状の沈線が巡る。弥生後期の時期を示す。

SC214 (213)

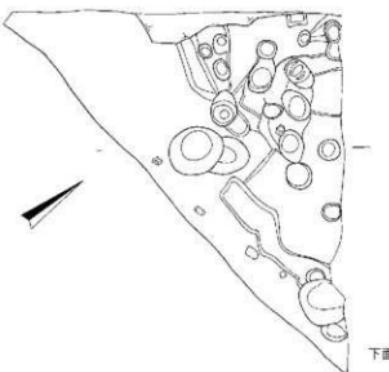
調査区の南東部で検出され、SD33 から切られる。床面のレベルに遺物が集中して出土した。これを SC214 出土遺物とし、遺物取り上げ後の床面が不整形のプランであるが、落ち込んでいたので別の堅穴住居跡の可能性も含み SC213 出土遺物とした。

出土遺物

63 ~ 68 は床面で集中して出土し、SC214 出土とネーミングしたものである。63 の高坏は脚部の 4箇所に径 1.0cm の孔を穿つ。内外面の器面が剥落し調整不明。64 の鉢形土器の外面の器面が剥落し、部分的にハケメがみられるが、ミガキ調整の可能性がある。底部中心部が肥厚し、わずかに突出する。65 は注口土器である。外面は粗い縦方向のハケメ後ナデが施され、下半部は火熱を受け赤変し、ススが付着



上面



下面

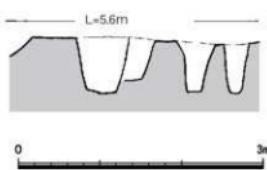


Fig.32 SC214 (213) 実測図 (1/60)

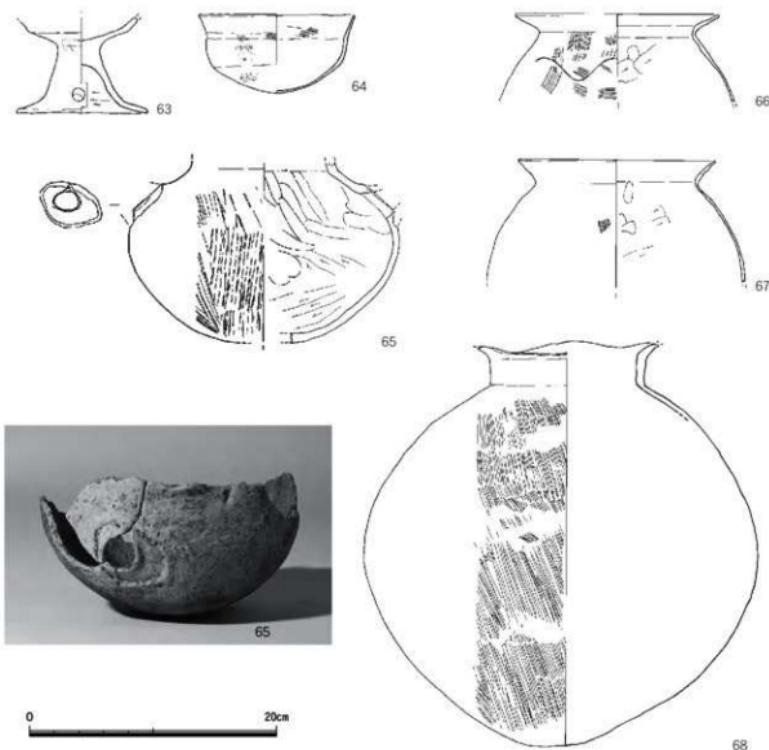


Fig.33 SC214 出土遺物実測図 (1/4)

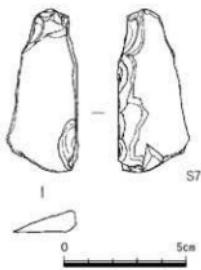


Fig.34 SC214 出土石器実測図 (1/2)

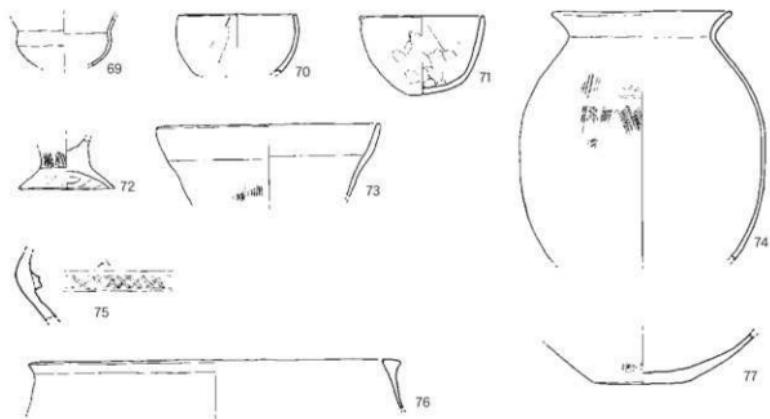


Fig.35 SC213 出土土器実測図 (1/4)

0 20cm

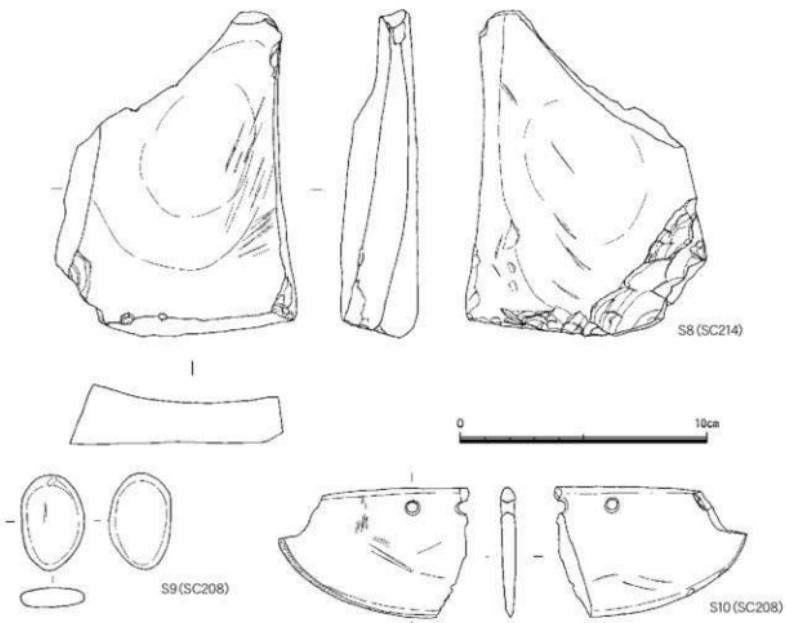


Fig.36 SC214、SC208 出土石器実測図 (1/2)

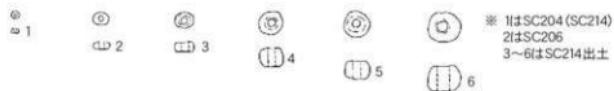


Fig.37 住居跡出土ガラス製小玉実測図 (1/1)

している。内面は下半部に横方向ないし搔き上げたケズリ、上半部には斜位の粗いナデ調整が施されている。66は布留系の壺である。口縁端部の跳ね上げはみられない。外面のハケメは縱方向の後に横方向に施すが、器面が剥落、摩耗し部分的に残る。また、波状の沈線が1条刻まれている。内面は頸部から1cm程下がった位置までヘラケズリを施した後、頸部付近をナデ押さえている。外面は赤変し、口縁部までススが付着している。67も布留系壺であるが、内外面の器面が剥落し調整は不明瞭である。68の壺体部は大半が遺存する。最大径が中位にあり、径約4cmの丸みを帯びた底部がつく。外面のハケメは比較的明瞭に残り、大略上、中、下位の3段階で施されている。S7は石剣の未製品か。片方の刃部の形状を呈した剥離を利用し、もう一方の側縁に連続剥離を施す。石材は粘板岩か。

69～77は埋土中からの出土である。69の小形壺は内外の器面が剥落し調整不明。70の鉢も69同様に薄く淡青灰色を呈す。外面ナデもしくはミガキとみられる。71の鉢は厚手で赤褐色を呈す。径3cmの平底がつき内外面、粗雑なナデ調整を施す。72は高壺の脚部である。外面柱状部に粗いハケメが残る。73は長頸壺の口縁部か。外面はミガキとみられ灰白色を呈す。74の壺は2、3mmの大砂粒を多く含み粗い胎土である。75の壺頭部には断面台形状の突帯を貼り付け、斜格子の刻みを施す。76、77は弥生中期の混入した土器片である。S8は床面上から出土した粒子が細かい砂岩製の砥石である。図示した5個のガラス小玉が出土した。すべてコバルトブルーに発色している。

出土遺物の時期は布留式併行期か。

SC208、209

調査区の東壁際で検出された。北側の一部がSC206に切られている。東西で床面のレベルが異なることからSC208と209に区別したが、ベッド状構造の高まりで同じ住居跡の可能性がある。壁高はSC209が4cm、SC208が16cmである。

出土遺跡

S9は両面磨かれている。S10は石包丁である。

その他の住居跡出土遺物

78～80は堅穴住居跡の可能性がある埋土から出土した土器である。80は高壺脚部、79は弥生中期の壺片、78は古墳後期の土師器壺取手である。

(4) 土壌 (SK)

SK239

SC206の貼床面下から検出された。このため上部のSC206の床面に落ち込みがみられた。長軸長157cm、短軸長120cmの楕円形プランを呈し、深さ60cmを測る。底面から約40cm高いレベルから図示した弥生中期前半の比較的大きな壺片が出土した。

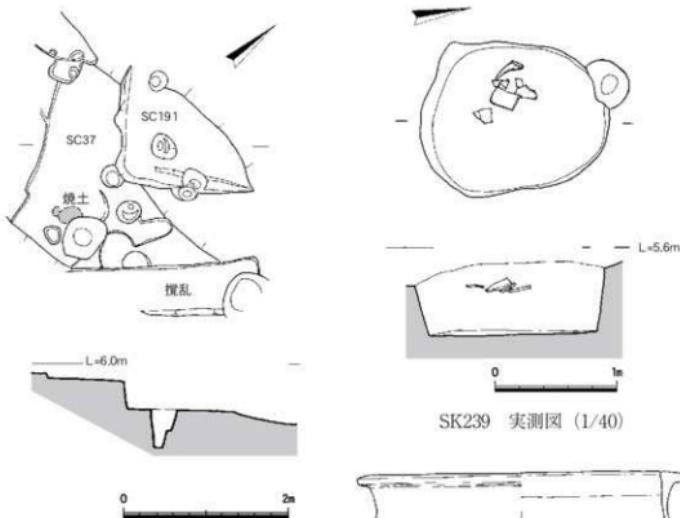
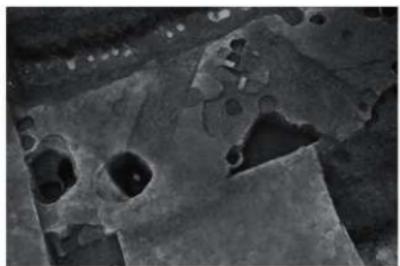
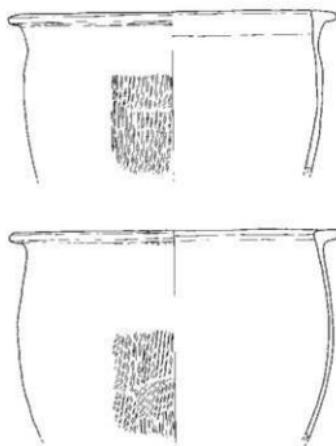


Fig.38 SC37、191 実測図 (1/60)



Ph.19 SC37、SC191 検出 (北から)



SK239 出土遺物 (1/4)

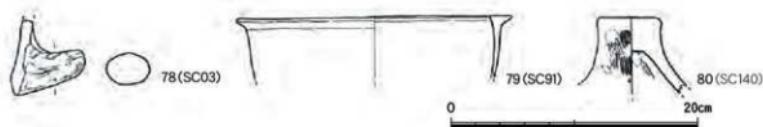


Fig.39 その他住跡出土土器実測図 (1/4)

(5)井戸 (SE)

調査区の南西部にSE18、19、28、31、35の5基が近接して検出された。

SE18

110×90cmのやや楕円形プランを呈す。検出面からの深さは250cmで、最下は標高3.45mの青白砂層まで達している。検出面から鳥栖ローム上部までは直に近い壁となり、埋土はローム混じりの黒色土である。淡い桃色を呈した鳥栖ロームの下部から白色に近くなる八女粘土にかけて壁体が窄まり、埋土も黒灰粘土に変わる。さらに青白砂層になると壁体が広がり、埋土も砂質となる。

最下に破損した92～96の土器が埋置されていた。

出土遺物

81の小型の直口壺は器厚が薄く、遺存する体部で2.5mm位である。外面はタテハケ後ミガキか。82は粗い成形の器台である。83の脚台は接合部から剥離し、外溝しながら脚部が延びる。84は上面の検出で出土した袋状口縁壺である。85の壺はわずかに胴部が張り、口縁部の屈曲は緩やかである。内面体部は縱方向のナデ調整である。87は体部と底部の境は不明瞭であるが、径4cm程度の平底を呈す。底部はナデ調整し、体部にはハケメを残す。88の底部は突出し、丸みがある。89は器厚が薄く頭部に断面三角形の突帯を貼り付ける。灰白色を呈し、胎土は砂粒が少なく緻密である。90の突帯にはハケメと同じと思われる

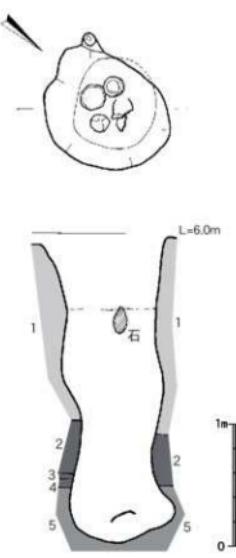


Fig.40 SE18 実測図 (1/40)



Ph.20 SE18 土層



Ph.21 SE18 下底遺物出土状況

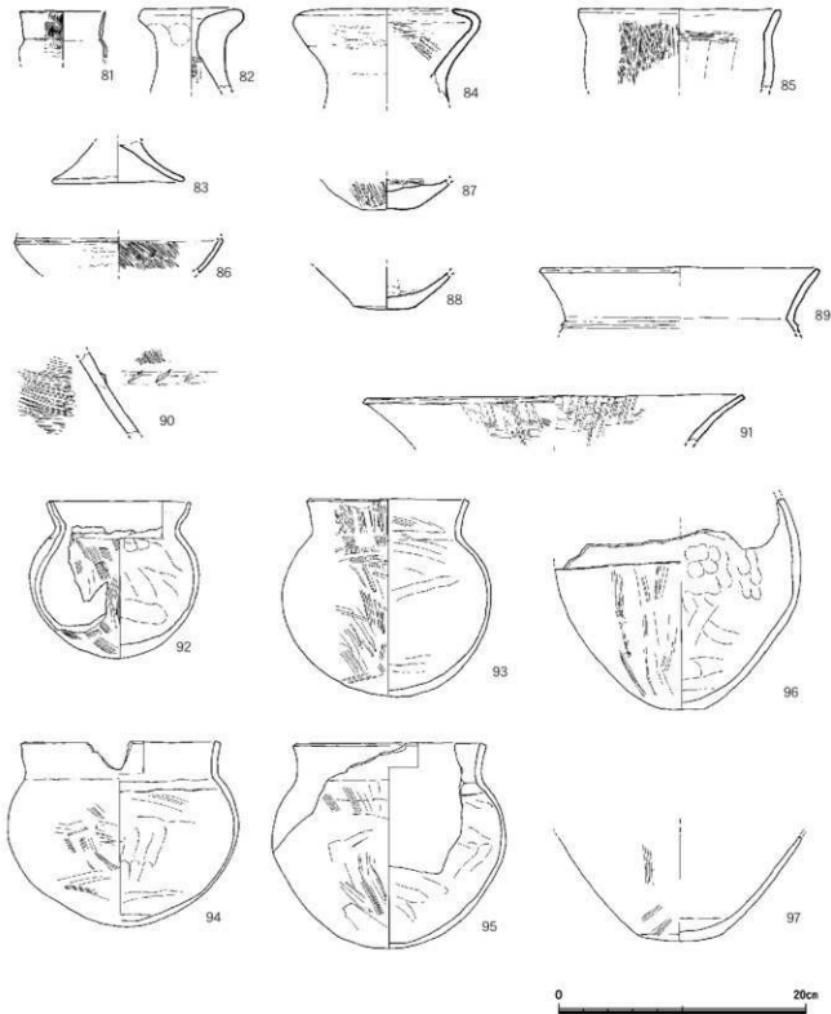


Fig.41 SE18 出土土器実測図 (1/4)



Ph. SE18 下底出土遺物

る原体を用いて刻みが施された櫛歯状の条線が残る。91の口縁部には内外面にヨコハケ後暗文を施す。92～96は下底に埋置された壺である。完形に近いが部分的に欠損し、打ち欠いた可能性がある。92の小形壺は口縁部から体部にかけて一部欠損し、4/5程度が遺存する。口縁部中位で緩やかに屈曲し内溝する。外面は口縁部から体部上位にかけてヨコナデ、下位にはタテハケを比較的明瞭に残す。内面は口縁部ヨコナデ、体部は横位から斜位のナデを施す。体部中位から底部にかけて径約11cmの輪郭が明瞭な円形の黒斑が付く。淡い褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。93は口縁部から体部にかけて2割程度が欠損している。他と焼成や調整が大きく異なる。灰色を呈し、器壁も薄く、胎土も砂粒が少なく緻密である。外面の口縁部はヨコナデ後、縱方向に微細な条線を残したナデやハケメを施し、その上に細く縱方向のミガキが施されている。体部上位はタテハケ後横位から斜位の細く粗いミガキを施し、下位にもタテハケ後に細く粗い縱位から斜位のミガキが残る。内面は口縁部に部分的に横位のハケメが残るがヨコナデを施し、体部はナデ調整である。外面の体部中位から底部にかけて径10cmの円形の黒斑がつく。94は口縁部の一部を欠いたほぼ完形の壺である。口縁部内外面はヨコナデ、外面体部上位は横位から斜位のナデによってハケメは残らず、下位は横位から斜位のハケメ後ナデが加えられている。内面体部はナデ調整を施し、頸部下1～1.5cm下に粘土帯の接合痕がみられる。淡黄褐色を呈し、外面口縁から中位と対置した下位から底部の2箇所に黒斑がみられる。95は褐色から灰色を呈し、成形や調整が粗雑である。口縁部は内外面ヨコナデ、外面の体部上位はナデ調整によりハケメは残らず、下位は縦位から斜位のハケメと部分的にケズリを施す。内面体部はナデ調整である。外面底部に径7cmの黒斑が付く。96は体部下位のみ完存する。径2cmの小さな平底を呈し、外面上位はナデ調整でハケメを残さないが、下位はタテハケが比較的残る。内面は上位から中位にかけて指ナデや押さえの痕が明瞭に残る。灰褐色を呈し、体部下位から底部にかけて13×9cmの楕円形の黒斑を有す。97は上層から出土した。丸みがある底部でハケメは外面底部に一部残る程度である。

出土遺物の下限の時期は弥生終末から、古墳初頭と考えられる。

SE19

上部は擾乱によって破壊され、また調査区際に位置するため完掘できなかった。径 $90 \times 80\text{cm}$ のやや楕円形プランを呈す。検出面から最下までの深さは 230cm を測り、標高 3.5m の淡青白色砂層まで達している。鳥栖ローム下部から八女粘土にかけて壁体が径 150cm まで広がり、また下層の淡青灰色砂層にかけて窄まる。埋土もこの壁体の形状に対応し、上層はローム混じりの褐色土が水平ないしレンズ状に堆積し黒色土との互層もみられる。下層は黒色粘土が堆積し、鳥栖ロームと八女粘土との境には層厚 10cm の灰白粘土が堆積し、上、下層の間層となっている。地山が淡青白色の砂層となったレベルの埋土は強グライ化した青粘土や淡青白粘土が波打って堆積している。最下には 104 の小壺が埋置されていた。

出土遺物

98 は上面から出土し混入した須恵器坏身である。99 も混入した須恵器残片である。屈曲部に波状文が施されている。100 は複合口縁壺である。101 は粗製の器台である。内外面にハケメを明瞭に残す。102 は器厚が 3mm 程度と薄く、口縁端部に刻みを有す。103 は丸みがある底部で、外面体部にはナデ調整が施されハケメはみられない。104 は最下底から出土した小壺である。口縁部を全周欠く。粗雑な成形で体部にはナデ調整が施されているが、体部下位の一部と底部には粗いハケメが残る。内面は体部上位までは横位から斜位のナデ調整、体部下位から底部にかけて粗いハケメや棒状の工具で引っ掻いて成形した痕跡がみられる。暗灰色を呈し、 1.5 から 2mm 程度の大きめの砂粒を多く含む。105、106 は袋状口縁壺である。107、108 は器台である。107 は内外面に丁寧な横位のナデ調整が施されハケメが消され不明瞭となっている。108 もナデ調整によってハケメが不明瞭となっている。3 ~ 4mm 大きな砂粒を多く含む。107 は器厚が 3mm 程度の薄い小型の壺である。外面に煤が付着する。110 は弥生中期の平底である。111 は壺体部下位に断面台形状の突帯を貼り付けている。外面タテハケ、内面板ナデを施す。112 も壺体部下位に刻みを施した断面三角形の突帯を貼り付けている。外面下位は横方向にタタキを施した後にタテハケで調整している。内面には斜位から縦方向に順次施したハケメが明瞭に残る。外面黒色を呈すが、黒斑と思われる。113 は広口の壺は頸部に断面三角形の突帯が貼り付けられている。体部内外面にはハケメを比較的の残す。底部はわずかに丸みをもつ。出土遺物の時期は弥生終末と考えられる。

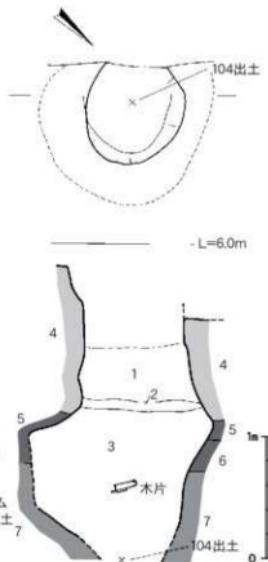


Fig.42 SE19 実測図 (1/40)



Ph.22 SE19 土層

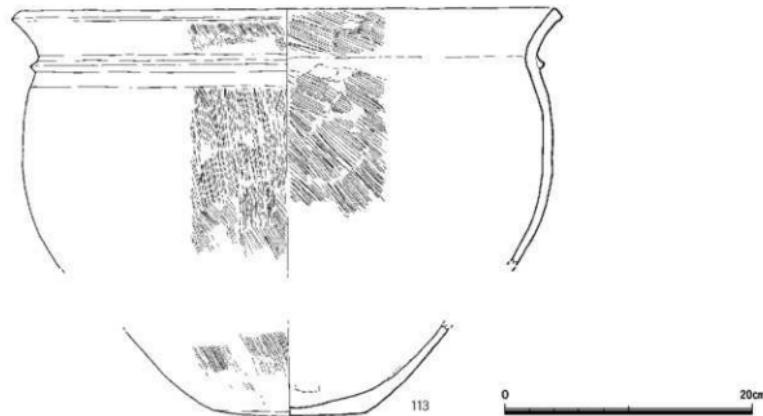
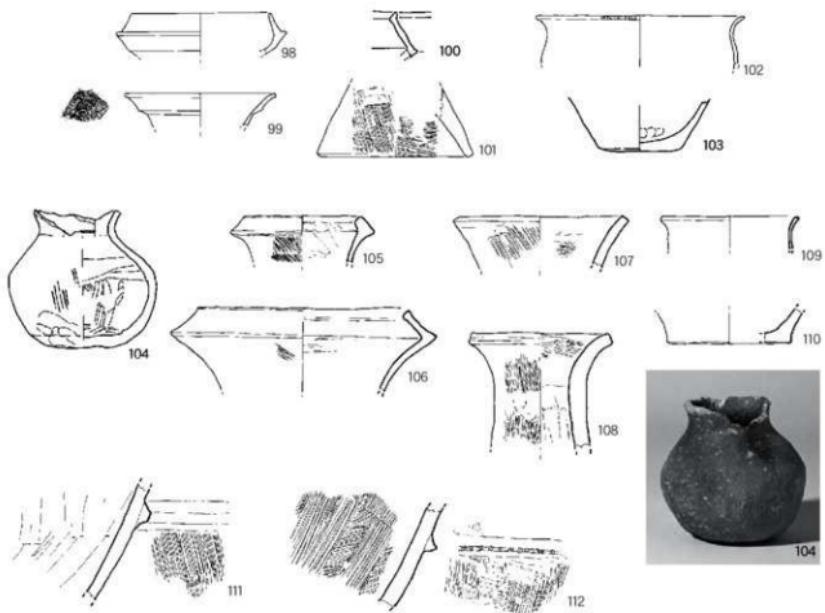


Fig.43 SE19 出土土器実測図 (1/4)

SE28

径 $1.0 \times 1.2m$ の楕円形プランを呈す。砂層の深くまで達し、崩落の恐れがあることから最下部までは掘削できなかったが検出面からの深さは 27m 以上に及び、灰白砂層中の標高 3.2m 以下を測る。鳥栖ロームまでは壁面が垂直を保ち、埋土は淡桃白色の八女粘土を含む黒色土である。一部この八女粘土が水平堆積している部分がある。地山が八女粘土に及ぶに従い、壁面が広がり、埋土が淡褐色ないし灰白色のロームとなる。さらに下層の淡青白色砂層から壁面が窄まり、埋土が淡青黒色の粘土となる。この層中に草木が薄層となった部分を挟む。最下は埋土の淡青白色の砂が淡褐色を帯び、壁面に酸化した褐鉄がとりまっている。

出土遺物

114、115 は複合口縁壺である。114 の頸部内外面にはハケメを明瞭に残す。115 の口縁部の屈曲部は突出し、その端部は小さな平坦面をなす。116 の底部はわずかに丸みをもつ。体部の内外面にはハケメが残るがナデ調整によって不明瞭となっている。117 は外面に赤色顔料が塗布されている。底部がわずかに突出し、丸みをもつ。外面最大径部付近は横位から斜位のヘラミガキやナデ、下位には斜位から縦位のナデないしぶきが施されている。内面体部下位には横位の板ナデもしくはナデの痕跡がみられる。118 は三角形状の突帯を貼り付け、その周囲はヨコナデを施し、外は縦位のハケメを明瞭に残す。内面は突帯より上位にはハケメを明瞭に残し、下位はナデ消されている。

出土遺物の時期は弥生終末とみられる。

SE31

調査区南西部で SC27 と切り合う。径 $90 \sim 100cm$ の歪な楕円形プランを呈す。八女粘土下部で壁が崩落し広がり、下層の淡青灰色砂層にかけて窄まる。埋土は最下部に淡桃灰白色の八女粘土を多く含む層が堆積するが、上層は分層が難しい八女粘土混じりの黒色土が堆積していた。

出土遺物

119 の複合口縁壺は外面に横位のハケメを残す。120 は弥生中期の甕口縁、121 は複合口縁部である。

SE35

SC27 と切り合い、SD09 に一部切られる。径 $120cm$ の正円形に近いプランを呈す。下底は八女粘土上部までのレベルで浅い。埋土は最下に青灰粘土を含む粘土層が堆積するほかは褐色の鳥栖ロームや淡桃灰色の八女粘土ブロックを含む褐色系の層で、井筒の痕跡は検出できなかった。

出土遺物

122 は土師皿である。内外面の器面が剥落し調整不明。

SE117

調査区の北西で SD01 に切られて検出された。径 $90 \times 100cm$ のやや楕円形プランを呈す。検出面からの深さは 220cm で最下面是灰白色砂層まで達した標高 3.4m 付近である。壁の崩壊はみられず、グラウンドした淡青灰色の八女粘土下部から窄まり、最下面の径は 50cm 位となる。

出土遺物

123 の器台は上面端部は丸みをもち、下面端部は水平な面をなす。器面が剥落し調整不明。124 の広口壺は頸部に低い三角形の突帯を貼り付け、内外面にハケメを比較的明瞭に残す。

125 は小さい丸みのある底部である。外面の調整は不明であるが、内面はナデ調整である。126 も小



Ph.23 SE28 土層

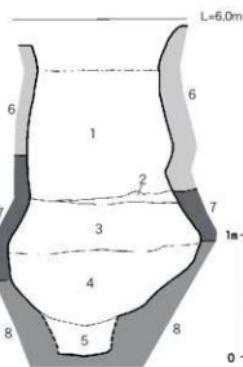
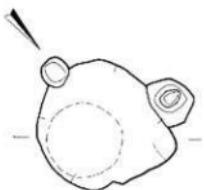


Fig.44 SE28 実測図 (1/40)

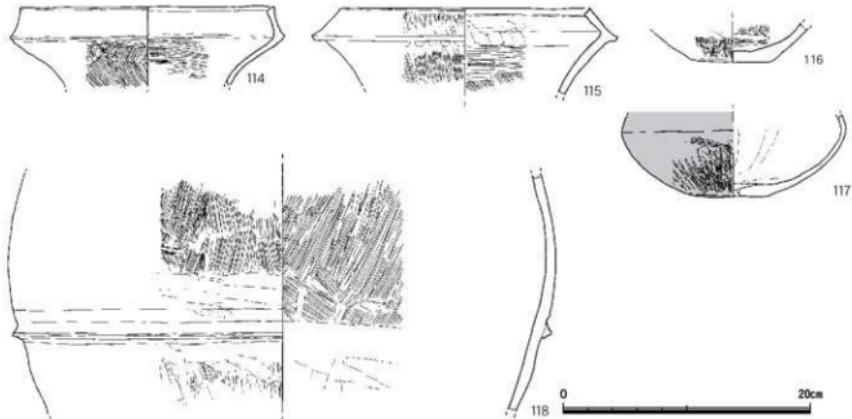


Fig.45 SE28 出土土器実測図 (1/4)

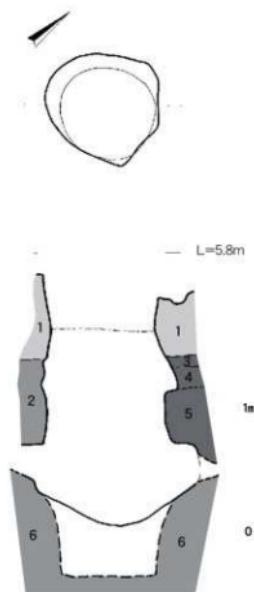


Fig.46 SE31 実測図 (1/40)

1. 明褐色(鳥栖)口一ム
2. 淡黄褐色(八女)粘土(軟質)
3. 明褐色～淡黄褐色口一ム(漸移層)
4. 淡黄褐色(八女)粘土(硬質)
5. 2と同上
6. 灰(緑)色砂質～砂

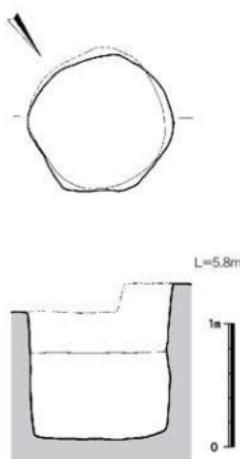


Fig.48 SE35 実測図 (1/40)



Fig.49 SE35 出土土器実測図 (1/4)



Fig.47 SE31 出土土器実測図 (1/4)



Ph.24 SE31 土層



Ph.25 SE35 土層

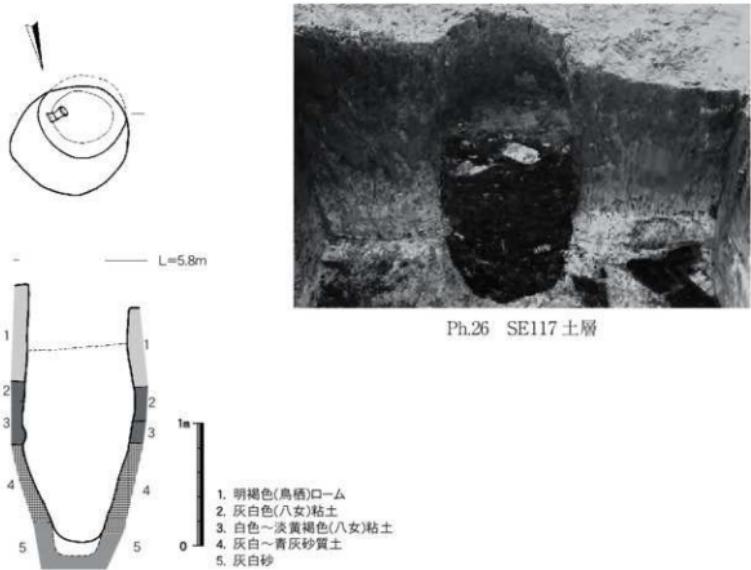


Fig.50 SE117 実測図 (1/40)

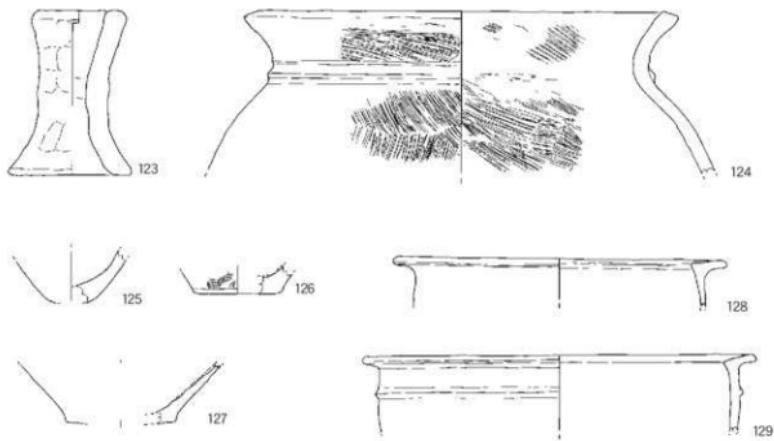
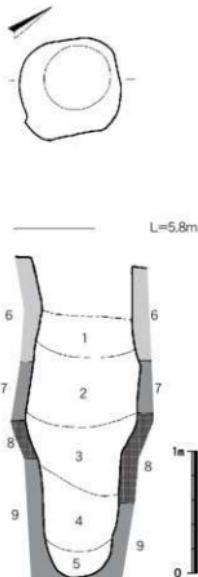


Fig.51 SE117 出土土器実測図 (1/4)

0 20cm



1. ロームブロック混褐色土
2. ロームブロック混黒色土
3. 青灰砂混黒色粘土
4. 黒色粘土
5. 灰色砂
6. 明褐色(鳥栖)ローム
7. 淡黃褐色~灰白(八女)粘土
8. 灰白~黄褐色砂
9. 青灰砂

Fig.52 SE128 実測図 (1/40)



Ph.27 SE128 土層

片であるが丸みある底部と思われる。127 の底部は突出している。
128、129 は弥生中期の壺片である。

出土遺物の下限の時期は弥生終末以降とみられる。

SE128

調査区の北東部で検出された。径約 80cm の小型の円形プランを呈す。検出面からの深さは 260cm で最下面は青灰色砂層中の標高 3.0m に達し深い。壁面の崩壊はみられず、灰白砂層から窄まる。埋土は水平ないし、斜めにブロック状に堆積していた。

出土遺物

130 の外側の調整は不明であるが、内面は斜位のハケメ後ナデを施す。131 は球形の体部をなし、底部が不明瞭である。外側は丁寧なナデを施し、部分的に縦位のミガキがみられハケメを残さない。内面も丁寧なナデ調整である。132 は弥生中期後半の壺である。133 は複合口縁の端部を屈曲し外溝している。出土遺物の下限の時期は弥生後期後半以降であろう。

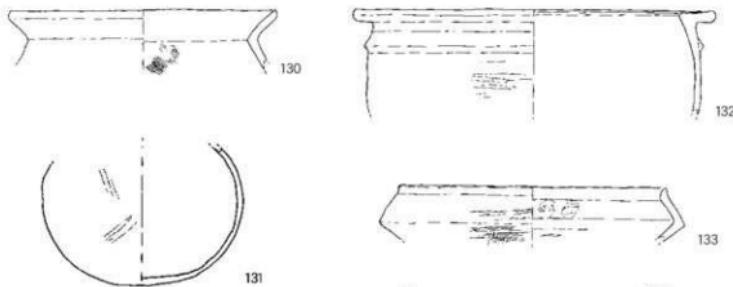


Fig.53 SE128 出土土器実測図 (1/4)

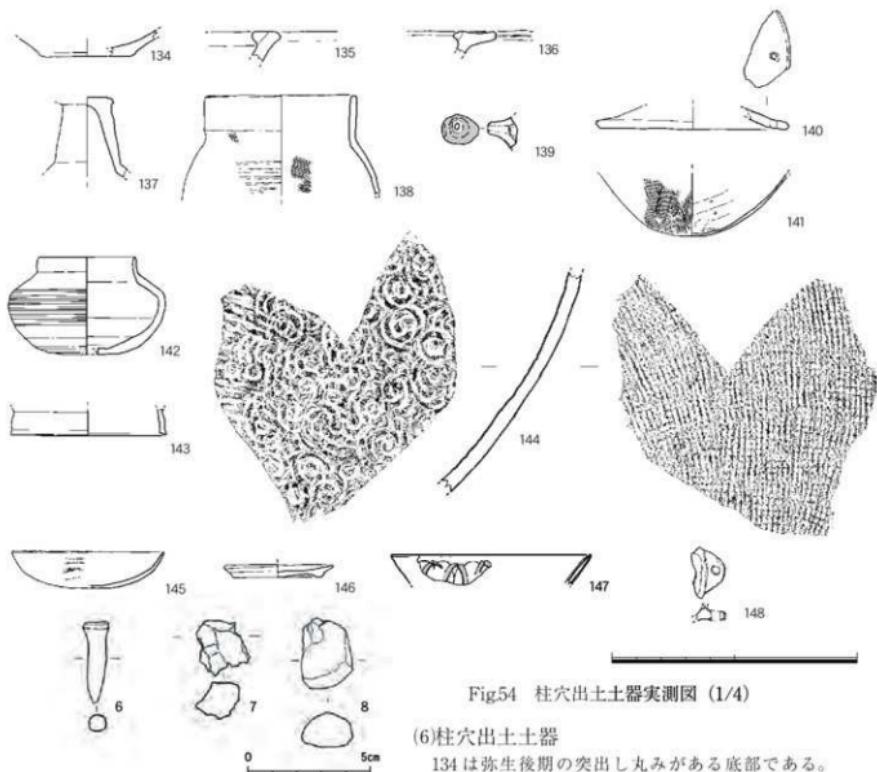


Fig.54 柱穴出土土器実測図 (1/4)

(6)柱穴出土土器

134は弥生後期の突出し丸みがある底部である。

135は口縁端部に刻みを施し、内側に断面三角形状に張り出した弥生中期前半の土器である。136の口縁部は内側に短く張り出し弥生中期後半とみられる。137は古墳初頭のわずかに湾曲した高杯柱状部である。

Fig.55 柱穴出土鉄器実測図 (1/2)

138の直口壺は外面体部に横位のタタキ痕がみられる。内面体部は横位から斜位のハケメないし板ナデを施す。139は外面に赤色顔料が塗布され、注口状の突端付近は剥落している。径3mmの孔を穿ち内面の孔周囲に絞り振れた痕がみられる。140は弥生の壺蓋である。穿孔が1箇所みられる。

141は布留系壺である。外面タテハケ後ナデ、内面の体部はナデないし板ナデ、底部はナデ押さえを施す。142は須恵器壺である。143は須恵器壺蓋である。144は須恵器壺片である。外面は木目直交タタキ、内面は同心円文の当具痕が残る。145は土師器壺である。内外面の調整は不明。146は瓦器壺底部である。摩耗し明確ではないが円形に打ち欠いた可能性がある。147は鎧運弁の青磁碗である。

148は陶器の釣具取手か。オリーブ色の釉色を呈す。鉄器6は釘、7は鉄滓、8は不明。

(7)その他の遺構出土遺物

149は体部に低い断面方形の突帯を貼り付け、ハケメ原体で斜格子を連続して刻む。150は白磁碗である。151は土製投弾である。全面黒色を呈す。S11は砥石である。1面は平坦で小さく敲打した

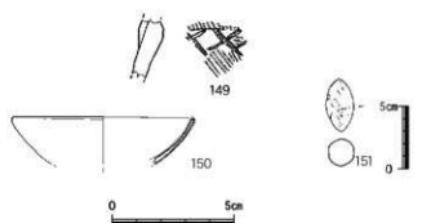


Fig.56 土壌出土土器実測図 (1/4)

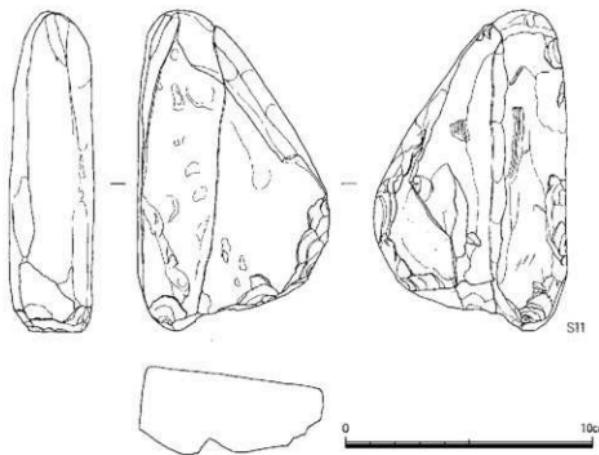


Fig.57 土壌出土石器実測図 (1/2)

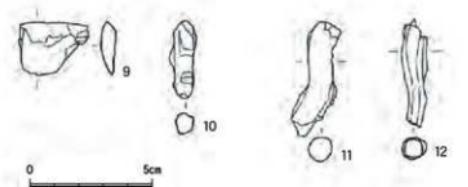


Fig.58 その他鐵器 (1/2)

れる時期以降となるが、攪乱から出土した3の朝鮮灰青陶器もしくは唐津の時期まで降るものか不明である。

痕がある。その裏面は自然面を多く残す。側面は少し波状となった滑らかな砥面がみられる。硬質砂岩製か。鉄器9は刀子か。10～12は釘である。

IV おわりに

本調査での主な遺構の時期は弥生終末から古墳初頭と中世後半期の時期である。弥生時代では中期の遺物も出土し、SK239が中期前半の貯蔵穴とみられる。しかし、他の堅穴住居跡や井戸の集落遺構は弥生後期後半から布留式併行期までの時期に限られ、この時期に集落が集約化しているとみられる。

中世後半期では大溝(濠)が2条平行しその1条は北側の4次調査で直に折れ方形に巡り居館の可能性がある。遺物が少なくSD01と02の時期と前後関係が決め難い。13の高麗青磁と思わ

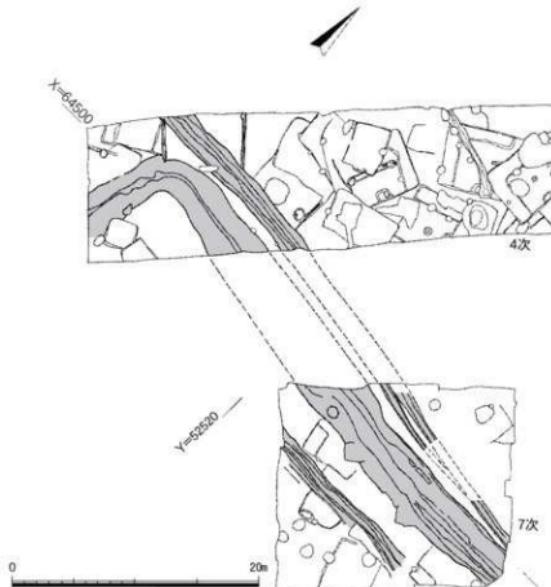


Fig.59 4次、7次、主要遺構配置図 (1/400)

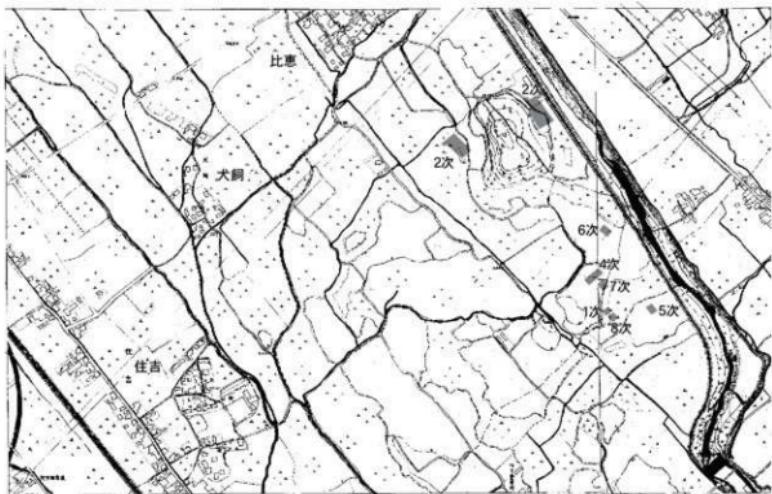


Fig.60 調査地点 (昭和初期、1/10,000)

その後、近世には昭和初期の地形図 (Fig.60) でもみられる位置や方向の SD32、33 の水路が掘削され水田化している。明治34年の地形図をみると山王遺跡には集落が営まれていない。近辺では比恵村が遺跡範囲外に位置した北側のラグーン地帯に立地し、比恵遺跡がのる中位段丘では北端の大飼と住吉に集落がみられるのみで、近世にその大半は水田化している。さらに広範にみれば、居館の可能性がある中世後半期の大溝(濠)は南側の那珂遺跡(東光寺、那珂、竹下の集落)や五十川遺跡で検出され、時期的に戦国期における大内氏家臣への知行地化など武家領地化と連動しているようである。

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき 6						
書名	山王遺跡 6						
副書名	山王遺跡第7次調査						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1187集						
編著者名	荒牧宏行						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2013年3月22日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			ml	
さんとういせき 山王遺跡 第7次	ふくおかしふくおかし 福岡県福岡市 さんとうの 山王 2丁目 29番	40132	2379	33°34'47"	130°26'6" ～ 20110728 ～ 20111019	320	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山王遺跡	集落	弥生 中世	竪穴住居跡 井戸 大溝	弥生土器 土師器 陶磁器	弥生終末の井戸が6基 検出され集中している。		
要約	弥生終末から古墳初頭の竪穴住居跡9棟以上、井戸6基が検出され、北側の第4次調査成果と合わせ、この時期の集落が集約していることが判明した。また、中世後半期の大溝が2条検出され、居館が構築されている可能性がある。						

山王遺跡 6

-山王遺跡群第7次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1187集

2013年（平成25年）3月22日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 博巧印刷
福岡市南区郡の川1丁目9-7